

駿河湾の深海魚 (15)

ソコハダカ (その2)

久保田 正 ・ 佐藤 武

ソコハダカ (*Benthoosema suborbitale*) は、米国の魚類学のパイオニアであり、後に北太平洋東部海域の漁業生物学者としても知られる Gilbert, C. H. (1859 ~ 1928、図 1.) によって 1906 (明治 39) 年に駿河湾湾奥部の三保沖から採集された個体をもとに新種として発表されました。彼の「The lantern-fishes of Japan」(1913) の論文にハダカイワシ類の新種 10 種を含む 31 種が記載されています。この論文では、ソコハダカはススキハダカ属 (*Myctophum*) 魚類として扱われています。当時は肛門上部

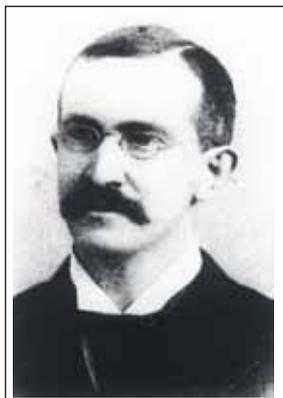


図 1. Charles H. Gilbert (1859 ~ 1928) (Dunn, 1996 より引用)

発光器 (SAO) の配置がススキハダカ属魚類と良くにていることから判断して小型個体のため尾柄部の発光腺の形状が違うことに気が付かなかったと考えられます。

彼は、47 歳の時、米国農商務省の調査船「アルバトロス号」

に乗り、日本近海の漁業調査で函館から鹿児島までの航海の途中、駿河湾に立ち寄り、1906 年 10 月中旬 (4 日間) に湾内の 23 地点からプランクトンネット、トロール網、ドレッジ採泥器などにより生物を採集しています。上記論文の原記載の個体は、0 ~ 540m の水層から開口式プランクトンネット採集で得た体長約 17mm です。現在この模式標本は、ワシントン市の国立自然史博物館に保管されています。このように日本周辺海域の本科魚類を初めとする深海魚類の研究は、米国の調査船による採集物から始まりました。

日本近海におけるソコハダカの食性生態の情報は少ないので、その知見を紹介します。研究に用いた標本は、沖縄南方海域から秋季から翌年の春季に稚魚ネットを用いて 200m 以深から得た 238 個体です。この採集で得た多くの中深層性のハダカイワシ類のうち、本種が最優先の出現でした。

本種の餌生物は、浮遊性軟体類、甲殻類幼生、貝形虫類、端脚類、オキアミ類、かいあし類、毛類類などの 7 生物群に分られ、さらにこの中で最も出現頻度が高かった、かいあし類は

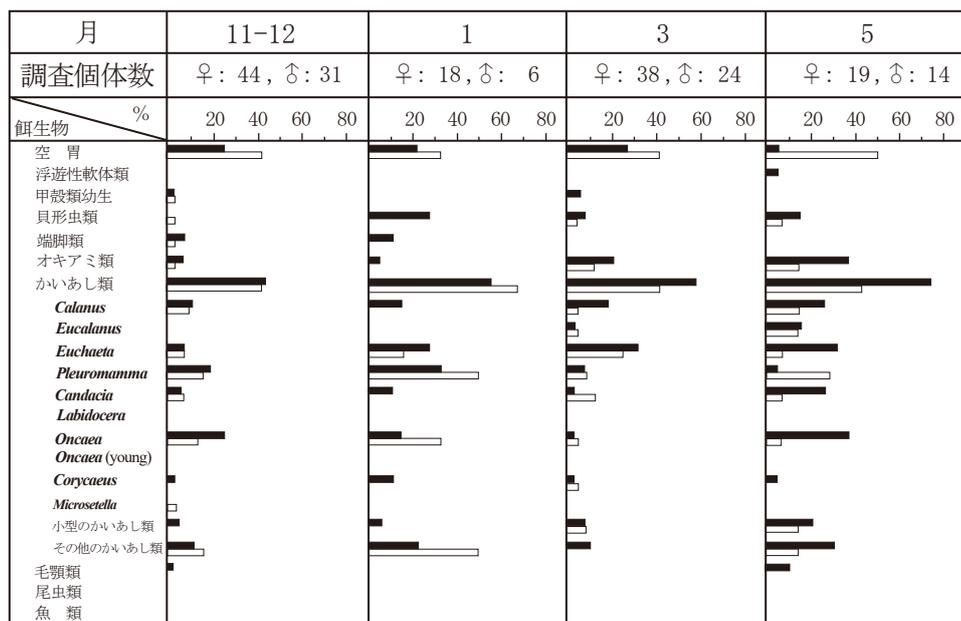


図 2. 沖縄南方海域から採集したソコハダカの餌生物組成の月別比較
各生物群の出現率は、調査個体数に対する値です。

■: 雌 □: 雄

属レベルまで調べ、月別・雌雄別に比較しました (図 2)。いずれの月も大きな変化は見られないが、春季の 5 月は、11-12 月に比べて雌雄ともに多少捕食が活発である傾向がみられました。また、かいあし類以外の甲殻類も月別や雌雄に係わらず捕食されています。このように本種の食性は、ブタハダカ属魚類を除く多くのハダカイワシ類と同様な甲殻類プランクトン捕食者です。